

平成27年度 食品安全モニター課題報告
「食品の安全性に関する意識等について」の結果(概要)
(平成28年3月実施)

- 470名の食品安全モニター（以下「モニター」という。）に対して毎年度、アンケート調査を実施。今回はウェブ上で回答する方法とした。
- 調査項目
 - I. 食品の安全性に係る危害要因等について
毎年同じ質問を行い、モニターの意識について経年的な傾向を把握
 - II. 食品の安全性の確保について
リスクコミュニケーションや食品安全委員会が発信している情報についての意識調査（平成15、20年度調査結果との比較）
 - III. 最近の食品の安全性に関するトピックスについて
食品の安全性に関するトピックスについて質問（「健康食品」など）

○調査結果(ポイント) —「調査結果の要約」は別添—

I. 食品の安全性に係る危害要因等について

日常生活を取り巻く不安を感じる分野（※）として、「食品安全」が平成21年度調査開始以来、初めて最下位となった。

不安を感じるハザードについては、「食中毒菌」「いわゆる健康食品」「放射性物質」が上位であるが、「放射性物質」が順位を下げている。

※『選択分野』

環境問題、自然災害、食品安全、重症感染症（新型インフルエンザなど）、犯罪、戦争・テロ、交通事故の7のリスク分野

II. 食品の安全性の確保について<食品安全委員会について>

食品安全委員会からの情報源のうちよく利用するものは、今回調査、平成20年度調査ともに「メールマガジン」、「ホームページ」、「季刊誌」が上位3位を占めている。

III. 最近の食品の安全性に関するトピックスについて<「健康食品」について>

- (1) 健康食品の摂取の状況は、「現在摂取している」が33%、「過去に摂取したことがあるが、現在は摂取していない」が43%、「摂取したことはない」が24%であった。
- (2) 「過去に摂取したことがあるが、現在は摂取していない」人の摂取をやめた理由は、割合が高い順に「効果が感じられなかったから」(57%)、「値段が高かったから」(36%)、「なんとなく」(23%)であった。
- (3) 「摂取したことはない」人の摂取しない理由は、割合が高い順に「日頃からバランスのとれた食生活をしており不要だから」(58%)、「効果を得られるか不明だから」(54%)、「安全性が不明だから」(48%)であった。

(参考) 調査概要

(1) 実施期間

平成 28 年 3 月 4 日～3 月 18 日

(2) 対象

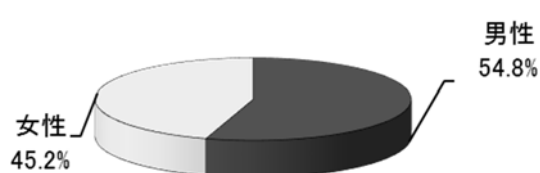
食品安全モニター 467 名

有効回答数 425 名 (有効回答率：91.0%)

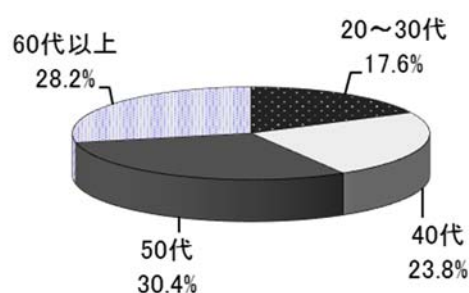
(3) 食品安全モニターの回答者人数の内訳

1) 性別・年代

図表 性別区分 (n=425)

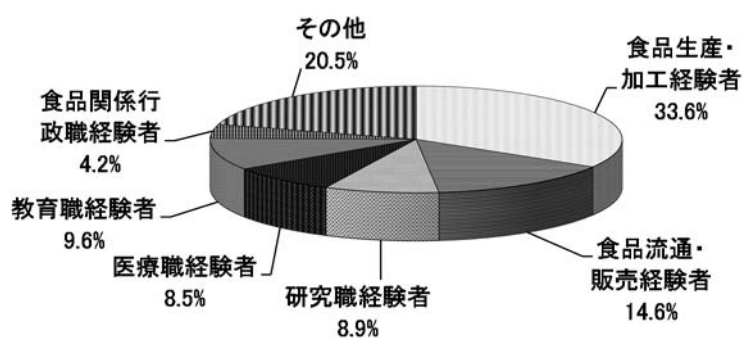


図表 年代区分 (n=425)



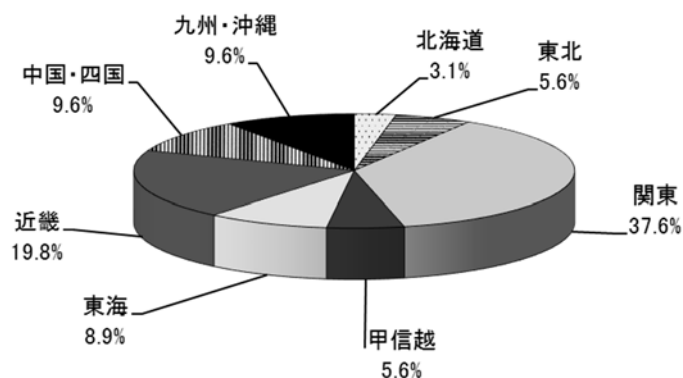
2) 職務経験区分

図表 職務経験区分 (n=425)



3) 居住地区区分

図表 居住地区区分 (n=425)



(別添)

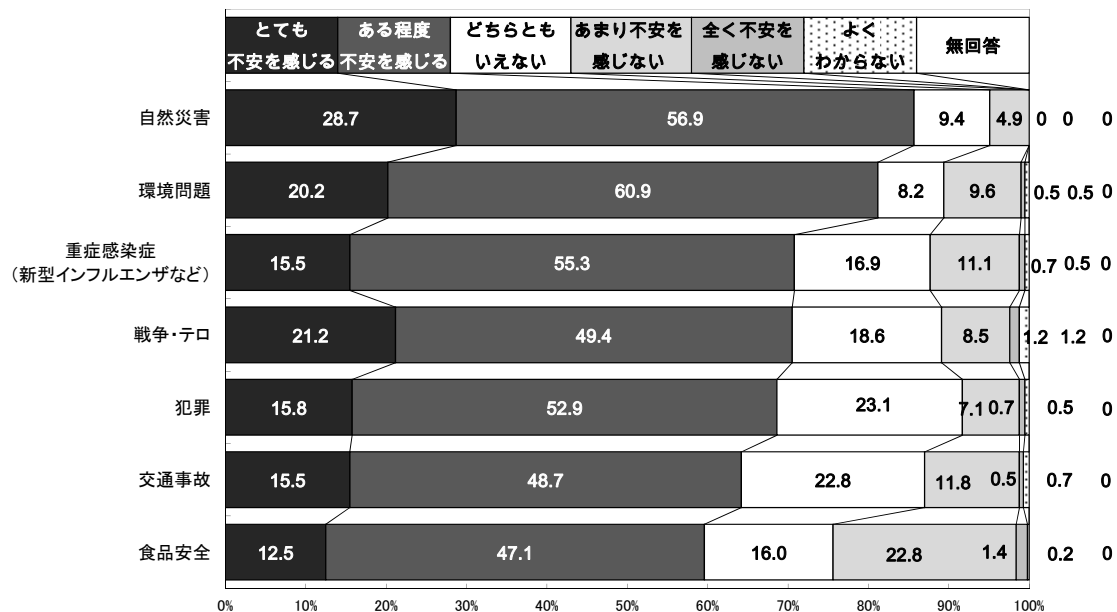
○調査結果の要約

I. 食品の安全性に係る危害要因等について

1. 日常生活を取り巻く分野別不安の程度（問1）

- 環境問題、自然災害、食品安全、重症感染症（新型インフルエンザなど）、犯罪、戦争・テロ、交通事故の7のリスク分野について、それぞれ不安の程度を尋ねたところ、「とても不安を感じる」「ある程度不安を感じる」を合わせた「不安を感じる」とした回答の割合は、7のリスク分野の中で「食品安全」(59.6%)が最も低かった。
- 平成21年度からの調査で「食品安全」が最も低い割合となるとともに、初めて7のリスク分野の中で最下位となった。

図表 1-1 日常生活を取り巻く分野別不安の程度 (n=425)

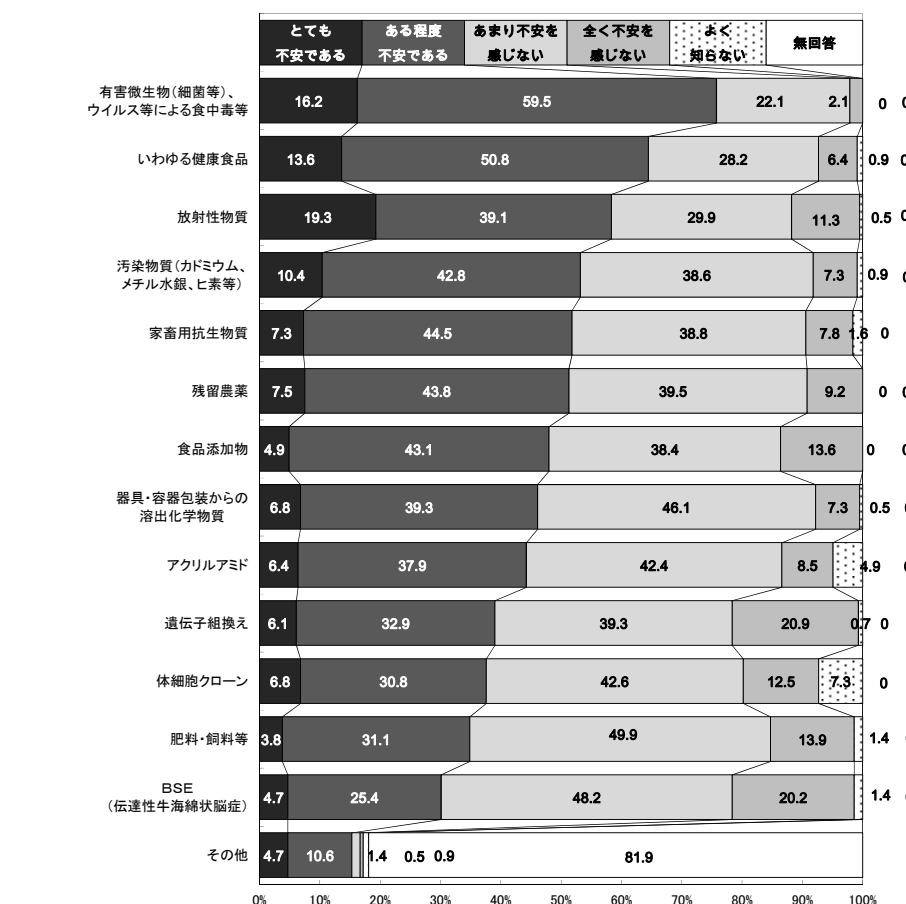


※ 「とても不安を感じる」「ある程度不安を感じる」の合計が高いもの順に並び替え

2. 食品の安全性の観点から感じているハザードごとの不安の程度（問2）

- 食品安全に関するハザードについて、それぞれ不安の程度を尋ねたところ、「とても不安である」と「ある程度不安である」の合計が最も高いのは「有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等」(75.7%)、次いで「いわゆる健康食品」(64.4%)、「放射性物質」(58.4%)と続いている。
- 「有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等」の「不安である」の回答割合は、平成24年度以降、4年連続ですべてのハザードの中で1位となっている。平成23年度に1位であった「放射性物質」は平成24～26年度は2位、今回調査は3位となっている。
- 食品の安全性の観点から感じるハザードごとの不安の程度の年度別回答割合について経年変化をみると、「不安である」の回答割合が横ばい傾向のハザードは、「有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等」(8割前後)、「いわゆる健康食品」(6割前後)であり、低下傾向が見られるハザードは「食品添加物」、「残留農薬」、「家畜用抗生物質」、「器具・容器包装からの溶出化学物質」、「汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)」、「BSE(伝達性牛海綿状脳症)」、「遺伝子組換え」、「体細胞クローン」、「放射性物質」であった。経年的に上昇傾向のあるハザードはなかった。

図表 2-1 食品の安全性の観点から感じているハザードごとの不安の程度 (n=425)



※ 「とても不安である」「ある程度不安である」の合計が高いもの順に並び替え

図表 2-2 食品の安全性の観点から感じるハザードごとの不安の程度（年度別）
（「とても不安である」「ある程度不安である」の合計割合の上位7位）

年度	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位
今回調査	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（75.7%）	いわゆる健康食品（64.4%）	放射性物質（58.4%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（53.2%）	家畜用抗生物質（51.8%）	残留農薬（51.3%）	食品添加物（48%）
平成26年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（78.5%）	放射性物質（64.1%）	いわゆる健康食品（64.1%）	残留農薬（58.8%）	家畜用抗生物質（55.4%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（53.6%）	食品添加物（50.4%）
平成25年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（80.8%）	放射性物質（67.5%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（62.6%）	いわゆる健康食品（62.6%）	残留農薬（61.5%）	家畜用抗生物質（59.5%）	器具・容器包装からの溶出化学物質（50.7%）
平成24年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（79%）	放射性物質（74.2%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（64.5%）	残留農薬（63.4%）	家畜用抗生物質（57.3%）	器具・容器包装からの溶出化学物質（55.6%）	いわゆる健康食品（55.5%）
平成23年度（第2回）	放射性物質（80.3%）	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（75.8%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（64.4%）	残留農薬（62.5%）	いわゆる健康食品（57.5%）	家畜用抗生物質（57.2%）	食品添加物（56.4%）
平成23年度（第1回）	放射性物質（85.5%）	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（76%）	残留農薬（60.3%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（58.5%）	家畜用抗生物質（56.4%）	肥料・飼料等（55.4%）	いわゆる健康食品（54.9%）
平成22年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（76.4%）	残留農薬（68.1%）	家畜用抗生物質（62.8%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（61.6%）	食品添加物（59.9%）	器具・容器包装からの溶出化学物質（59.9%）	いわゆる健康食品（56.4%）
平成21年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（79.6%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（78.1%）	残留農薬（73.1%）	家畜用抗生物質（68.2%）	器具・容器包装からの溶出化学物質（67.5%）	遺伝子組換え（64.6%）	食品添加物（62.5%）
平成20年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（75.3%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（74.8%）	残留農薬（70.6%）	家畜用抗生物質（64.4%）	器具・容器包装からの溶出化学物質（63.2%）	BSE（伝達性牛海綿状脳症）（62.5%）	体細胞クローン（59.2%）
平成19年度	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（88.4%）	残留農薬（80.2%）	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（78.3%）	家畜用抗生物質（74.2%）	食品添加物（67.3%）	BSE（伝達性牛海綿状脳症）（64.4%）	いわゆる健康食品（62.8%）
平成18年度	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（88.4%）	残留農薬（82.8%）	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（80.6%）	家畜用抗生物質（77.3%）	BSE（伝達性牛海綿状脳症）（75%）	食品添加物（72.7%）	遺伝子組換え（69.4%）
平成17年度	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（90.2%）	残留農薬（86.4%）	家畜用抗生物質（80.4%）	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（79.3%）	遺伝子組換え（77%）	BSE（伝達性牛海綿状脳症）（75.2%）	食品添加物（72.5%）
平成16年度	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（91.7%）	残留農薬（89.7%）	家畜用抗生物質（83.5%）	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（80.9%）	食品添加物（76.4%）	遺伝子組換え（74.7%）	BSE（伝達性牛海綿状脳症）（74.5%）

※以下の調査項目については、（ ）内の年度から追加した。
器具・容器包装からの溶出化学物質（平成20年度）、体細胞クローン（平成20年度）、肥料・飼料（平成22年度）、放射性物質（平成23年度）、アクリルアミド（平成26年度）

3. 食品の安全性の観点から不安を感じている理由（放射性物質以外）（問3）
- 食品の安全性の観点から放射性物質以外のハザードについて「とても不安である」、「ある程度不安である」と回答した者に対し、不安を感じている理由を尋ねたところ、「事業者の法令遵守や衛生管理が不十分なため」「安全性についての科学的な根拠に疑問があるため」の2つが上位に挙がっているハザードが多い。

図表 3-1 食品の安全性の観点から不安を感じている理由

ハザード	1位	2位	3位
食品添加物	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分なため (28.9%) [13.9%]	安全性についての科学的な根拠に疑問があるため (26.5%) [12.7%]	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分なため (15.2%) [7.3%]
残留農薬	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分なため (34.9%) [17.9%]	安全性についての科学的な根拠に疑問があるため (16.1%) [8.2%]	過去に問題になった事例があるため (14.2%) [7.3%]
家畜用抗生物質	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分なため (31.8%) [16.5%]	安全性についての科学的な根拠に疑問があるため (16.4%) [8.5%]	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分なため (15.0%) [7.8%]
器具・容器包装からの溶出化学物質	安全性についての科学的な根拠に疑問があるため (20.4%) [9.4%]	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分なため (17.3%) [8.0%]	事業者からの食品の安全性に関する情報提供が不十分なため (15.3%) [7.1%]
汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）	過去に問題になった事例があるため (36.3%) [19.3%]	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分なため (17.3%) [9.2%]	安全性についての科学的な根拠に疑問があるため (11.9%) [6.4%]
有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分なため (39.4%) [29.9%]	過去に問題になった事例があるため (26.4%) [20.0%]	漠然と不安 (8.1%) [6.1%]
			安全性についての科学的な根拠に疑問があるため (8.1%) [6.1%]
BSE（伝達性牛海綿状脳症）	過去に問題になった事例があるため (38.3%) [11.5%]	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分なため (17.2%) [5.2%]	安全性についての科学的な根拠に疑問があるため (15.6%) [4.7%]
遺伝子組換え	安全性についての科学的な根拠に疑問があるため (44.6%) [17.4%]	漠然と不安 (15.1%) [5.9%]	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分なため (9.6%) [3.8%]
			行政による規制が不十分なため (9.6%) [3.8%]
体細胞クローン	安全性についての科学的な根拠に疑問があるため (38.1%) [14.4%]	漠然と不安 (28.1%) [10.6%]	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分なため (10.0%) [3.8%]
いわゆる健康食品	安全性についての科学的な根拠に疑問があるため (33.9%) [21.9%]	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分なため (19.7%) [12.7%]	行政による規制が不十分なため (15.7%) [10.1%]
肥料・飼料等	事業者の法令遵守や衛生管理が不十分なため (27.7%) [9.6%]	安全性についての科学的な根拠に疑問があるため (18.2%) [6.4%]	漠然と不安 (16.2%) [5.6%]
アクリルアミド	漠然と不安 (23.9%) [10.6%]	安全性についての科学的な根拠に疑問があるため (19.7%) [8.7%]	行政からの食品の安全性に関する情報提供が不十分なため (13.3%) [5.9%]

※（ ）内は「不安である」と回答した人数に占める割合、[]内は回答者全体（425名）に占める割合である。

4. 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由（放射性物質以外）（問4）

- 問2で、食品の安全性の観点から放射性物質以外のハザードについて「あまり不安を感じない」、「全く不安を感じない」と回答した者に対し、不安を感じていない理由を尋ねたところ、「安全性についての科学的な根拠に納得」「行政による規制が十分なため」の2つが上位に挙がっているハザードが多い。

図表 4-1 食品の安全性の観点から不安を感じていない理由

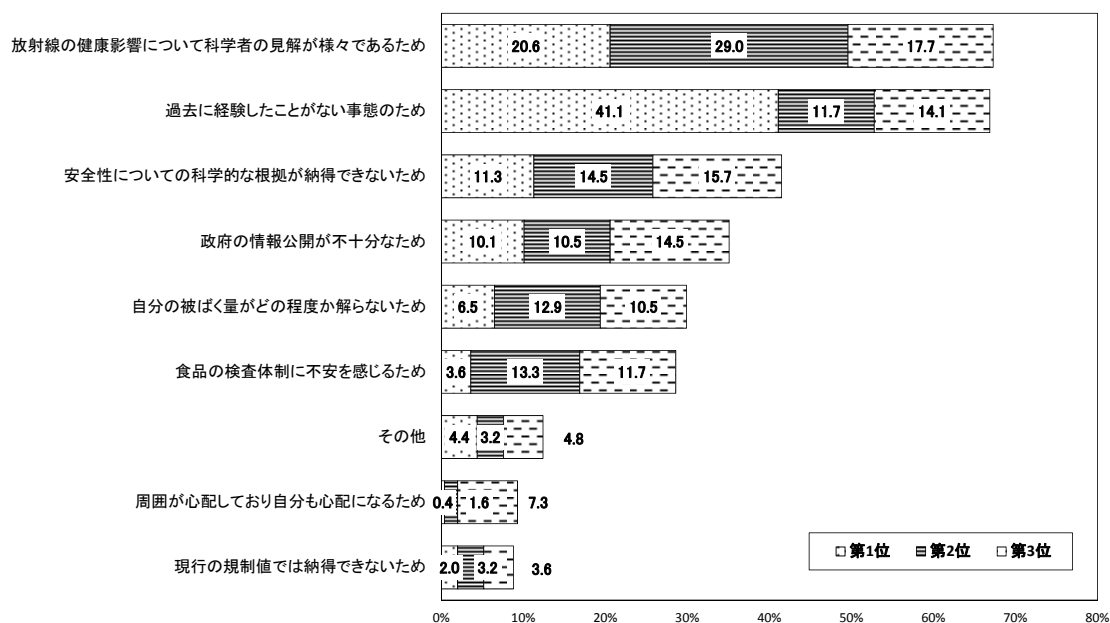
ハザード	1位	2位	3位
食品添加物	安全性についての科学的な根拠に納得しているため (61.5%) [32%]	行政による規制が十分なため (21.3%) [11.1%]	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分なため (5.4%) [2.8%]
残留農薬	安全性についての科学的な根拠に納得しているため (40.6%) [19.8%]	行政による規制が十分なため (34.3%) [16.7%]	事業者の法令遵守や衛生管理が十分なため (8.2%) [4.0%]
家畜用抗生物質	行政による規制が十分なため (33.3%) [15.5%]	安全性についての科学的な根拠に納得しているため (29.3%) [13.6%]	事業者の法令遵守や衛生管理が十分なため (10.1%) [4.7%]
器具・容器包装からの溶出化学物質	安全性についての科学的な根拠に納得しているため (28.2%) [15.1%]	行政による規制が十分なため (26.9%) [14.4%]	事業者の法令遵守や衛生管理が十分なため (12.3%) [6.6%]
汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)	行政による規制が十分なため (43.6%) [20%]	安全性についての科学的な根拠に納得しているため (17.9%) [8.2%]	漠然と安心 (12.3%) [5.6%]
有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等	事業者の法令遵守や衛生管理が十分なため (22.3%) [5.4%]	行政による規制が十分なため (21.4%) [5.2%]	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分なため (15.5%) [3.8%]
BSE(伝達性牛海綿状脳症)	行政による規制が十分なため (41.6%) [28.5%]	安全性についての科学的な根拠に納得しているため (26.1%) [17.9%]	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分なため (12.7%) [8.7%]
遺伝子組換え	安全性についての科学的な根拠に納得しているため (41.4%) [24.9%]	行政による規制が十分なため (21.5%) [12.9%]	過去に問題になった事例がないため (14.5%) [8.7%]
体細胞クローン	安全性についての科学的な根拠に納得しているため (30.3%) [16.7%]	行政による規制が十分なため (22.6%) [12.5%]	過去に問題になった事例がないため (18.8%) [10.4%]
いわゆる健康食品	漠然と安心 (25.2%) [8.7%]	その他 (16.3%) [5.6%]	安全性についての科学的な根拠に納得しているため (13.6%) [4.7%]
肥料・飼料等	行政による規制が十分なため (29.5%) [18.8%]	安全性についての科学的な根拠に納得しているため (21.8%) [13.9%]	漠然と安心 (17.3%) [11.1%]
アクリルアミド	安全性についての科学的な根拠に納得しているため (29.2%) [14.8%]	過去に問題になった事例がないため (17.1%) [8.7%]	行政からの食品の安全性に関する情報提供が十分なため (17.1%) [8.7%]

※()内は「不安を感じない」と回答した人数に占める割合、[]内は回答者全体(425名)に占める割合である。

5. 放射性物質について不安を感じる理由（問5）

- 放射性物質について不安を感じる理由を、強く当てはまる順に3つ尋ねたところ、第1位は「過去に経験したことがない事態のため」が41.1%で最も多く、2位以降を大きく離している。第1位から第3位に選ばれたものの単純合計は、第1位が「放射線の健康影響について科学者の見解が様々であるため」(67.3%)、第2位「過去に経験したことがない事態のため」(66.9%)となっている。

図表 5-1 放射性物質について不安を感じる理由（n=248）



※回答者割合が多い順に並び替え

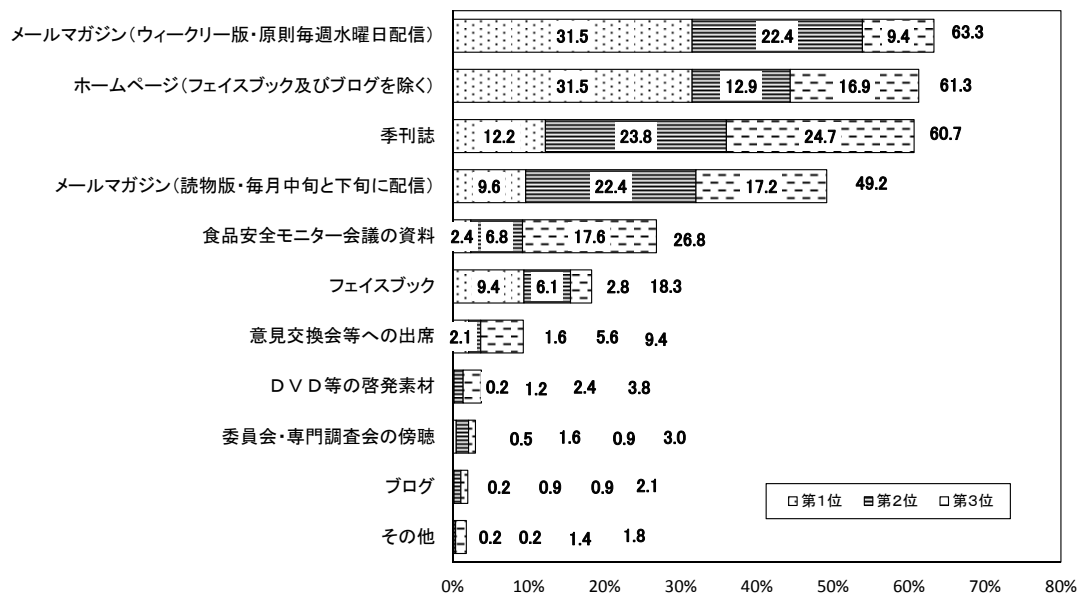
II. 食品の安全性の確保について

<食品安全委員会について>

6. よく利用する食品安全委員会からの情報（問9）

- 食品安全委員会からの情報源をよく利用するものから順に3つ尋ねたところ、第1位に挙げられたものは「メールマガジン（ウィークリー版）」と「ホームページ（Facebook及びブログを除く）」が31.5%と最も多かった。第1位から第3位に選ばれたものの単純合計は、「メールマガジン（ウィークリー版）」（63.3%）、「ホームページ（Facebook及びブログを除く）」（61.3%）、「季刊誌」（60.7%）であった。
- 平成20年度調査でも上位3位は同じ順位であった。^(注)

図表 6-1 よく利用する食品安全委員会からの情報源（n=425）

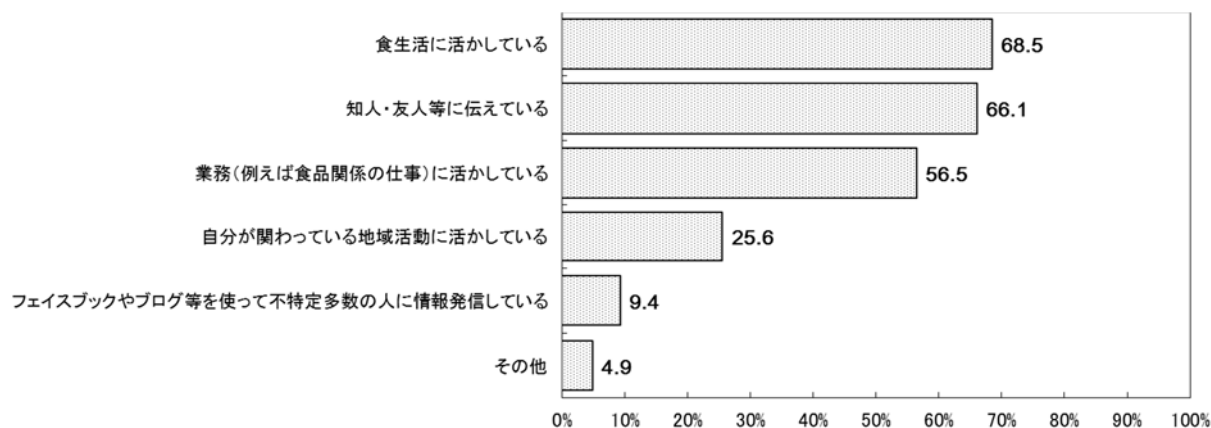


注：平成20年度当時は、メールマガジン読み物版、Facebook、ブログによる情報発信は行っていなかった。

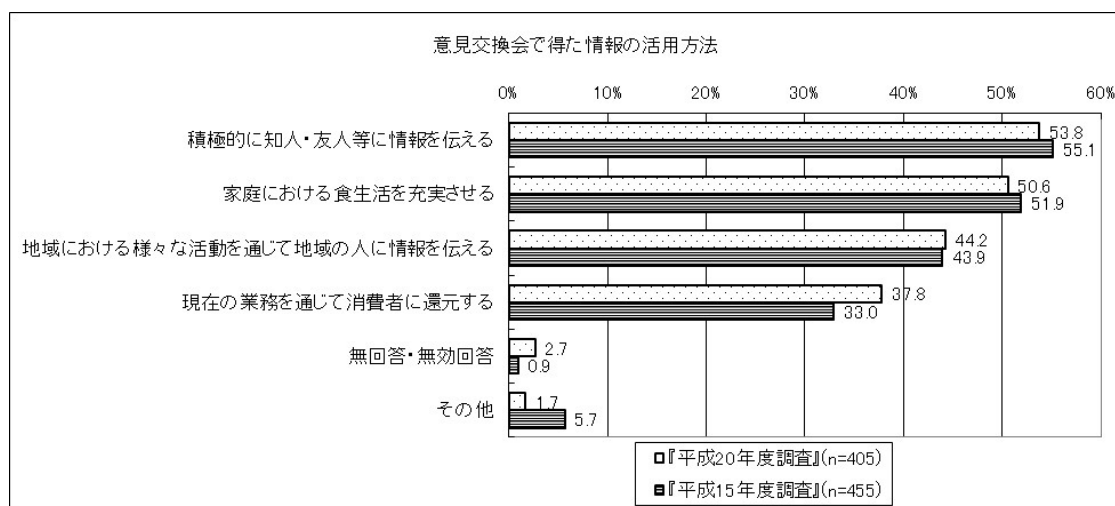
7. 食品安全委員会から得た情報の活用方法（問 11）

- 食品安全委員会から得た情報の活用について尋ねたところ、「食生活に活かしている」が 68.5%で最も多く、次いで「知人・友人等に伝えている」が 66.1%、「業務（例えば食品関係の仕事等）に活かしている」が 56.5%であった。
- 平成 15、20 年度の同様の調査結果では、平成 15、20 年度ともに、1 位「積極的に知人・友人等に情報を伝える」、2 位「家庭における食生活を充実させる」、3 位「地域における様々な活動を通じて地域の人に情報を伝える」、4 位「現在の業務を通じて消費者に還元する」であった。今回調査と比較すると、地域活動で活かす（地域の人に情報を伝える）、との回答が減少している。

図表 7-1 食品安全委員会から得た情報の活用方法（n=425）



<参考>意見交換会で得た情報の活用方法（平成 15・20 年度調査結果）



※平成 15 年度及び、20 年度調査では、「意見交換会で得た情報などの活用」について、2 つ以内で選択させた（今回調査では「食品安全委員会から得た情報の活用」について、当てはまるもの全てを選択させた）。

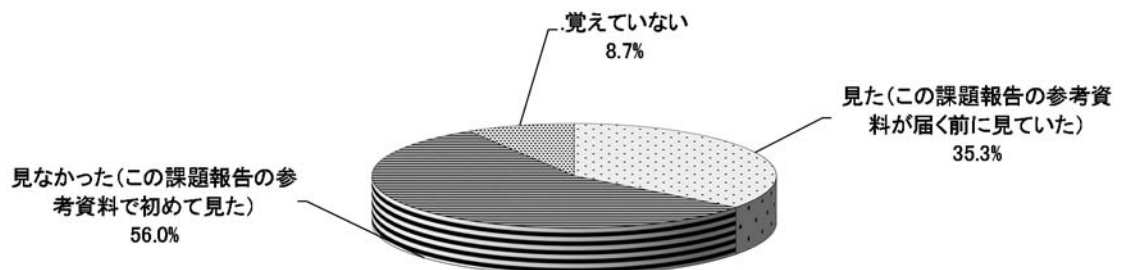
III. 最近の食品の安全性に関するトピックスについて

(1) 加工肉・レッドミートに関する IARC（国際がん研究機構）の発表について

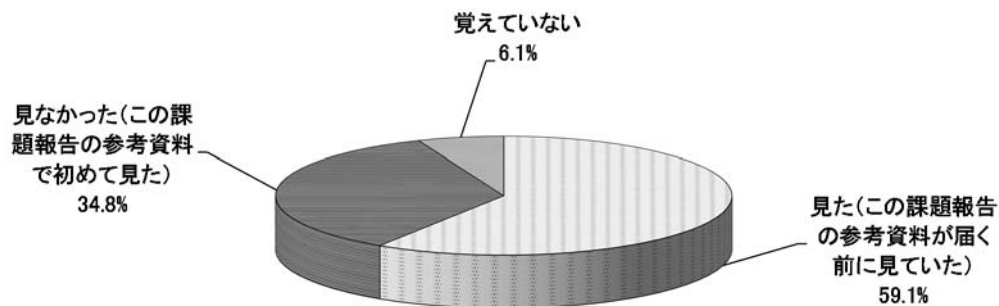
8. 食品安全委員会で発信した情報の閲覧状況（問 14）

- 加工肉・レッドミートに関する IARC の発表の情報の確認状況について尋ねたところ、Facebook を媒体とした場合は、「見た」が 35.3%、ホームページを媒体とした場合は、「見た」が 59.1%で、ホームページを見た割合が高かった。

図表 8-1 食品安全委員会が発信した「加工肉・レッドミートに関する IARC の発表について」の情報の確認状況（媒体：Facebook）（n=425）



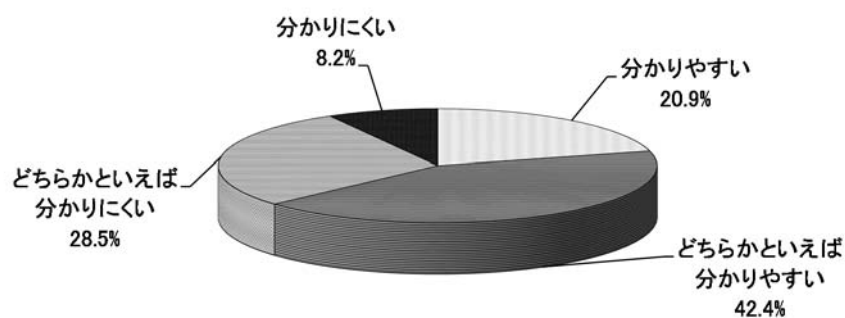
図表 8-2 食品安全委員会が発信した「加工肉・レッドミートに関する IARC の発表について」の情報の確認状況（媒体：ホームページ）（n=425）



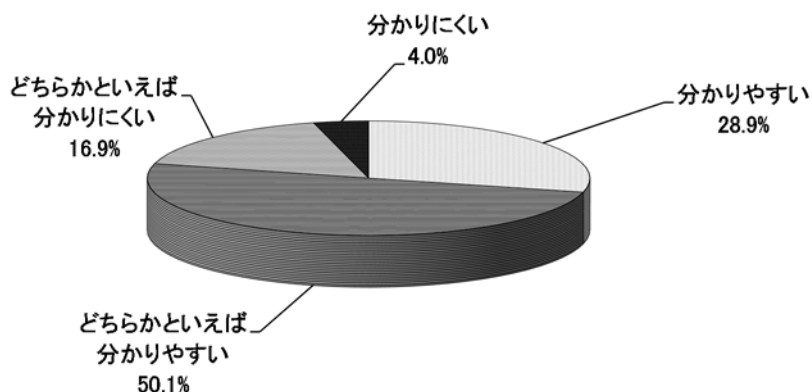
9. 媒体別の情報の評価(問 15)

- 媒体別の情報の評価について尋ねたところ、Facebook で「分かりやすい」と「どちらかといえば分かりやすい」の合計は 63.3%、ホームページでは 79.0%であった。

図表 9-1 食品安全委員会が発信した「加工肉・レッドミートに関する IARC の発表について」の情報の評価（媒体：Facebook）(n=425)



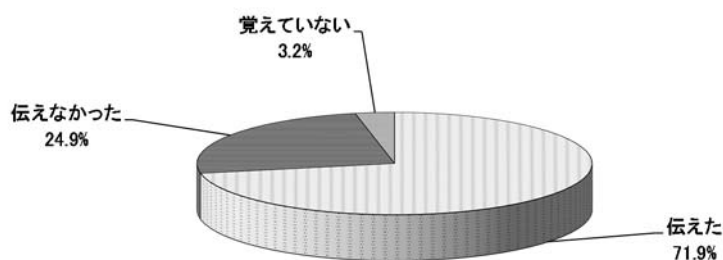
図表 9-2 食品安全委員会が発信した「加工肉・レッドミートに関する IARC の発表について」の情報の評価（媒体：ホームページ）(n=425)



10. 食品安全委員会が発信した「加工肉・レッドミートに関する IARC の発表について」の、周囲への伝達状況(問 16)

- 問 14 で、1 つでも「見た」を選んだ人に、情報の内容について周囲の人に伝えたかどうかを尋ねたところ、「伝えた」が 71.9%で、「伝えなかった」が 24.9%であった。

図表 10-1 食品安全委員会が発信した情報の共有 (n=285)

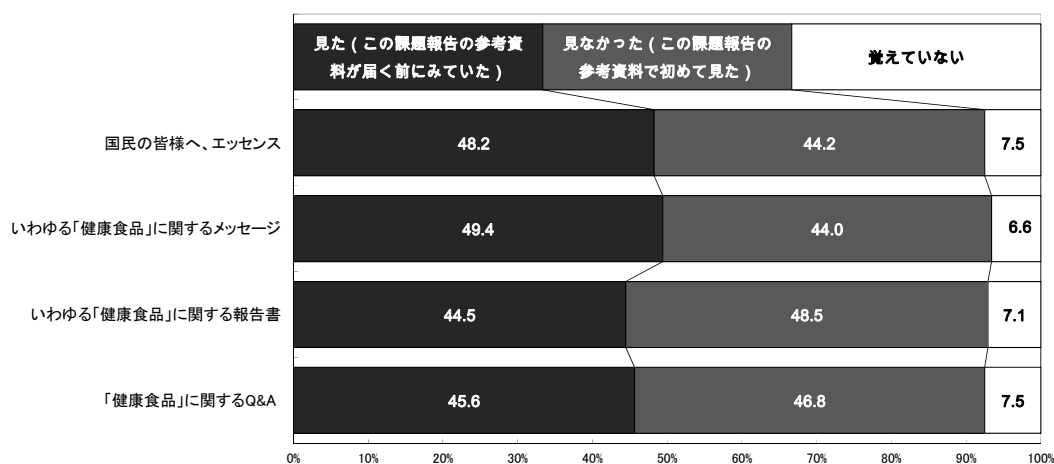


(2) 「健康食品」について

11. 食品安全委員会が発信した「健康食品」についての閲覧状況(問 17)

- 食品安全委員会が発信した「健康食品」についての情報の閲覧状況を尋ねたところ、【国民の皆様へ、エッセンス】、【いわゆる「健康食品」に関するメッセージ】、【いわゆる「健康食品」に関する報告書】、【「健康食品」に関するQ&A】のいずれの資料も、「見た（この課題報告の参考資料が届く前にみていた）」が40%台であった。

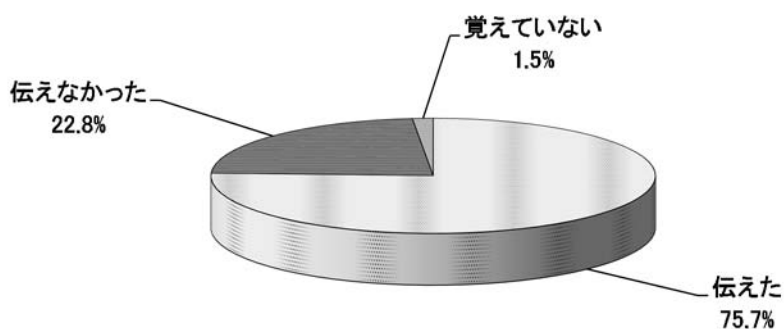
図表 11-1 食品安全委員会が発信した「健康食品」についての情報の閲覧状況 (n=425)



12. 食品安全委員会で発信した「健康食品」について、周囲への伝達状況(問 18)

- 問 17 で1つでも「見た」を選んだ人に、資料の内容について周囲の人に伝えたかどうかを尋ねたところ、「伝えた」が75.7%、「伝えなかった」が22.8%であった。

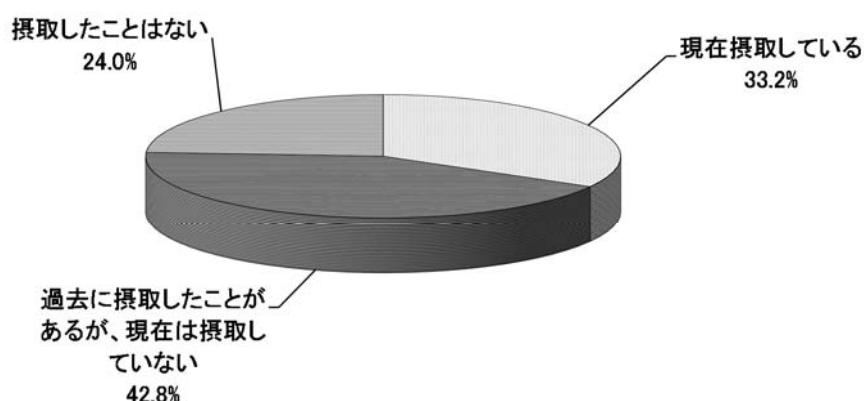
図表 12-1 食品安全委員会で発信した「健康食品」についての情報の共有 (n=259)



13. 「健康食品」の摂取の状況(問 19)

- 健康食品の摂取の状況を尋ねたところ、「現在摂取している」が 33.2%、「過去に摂取したことがあるが、現在は摂取していない」が 42.8%、「摂取したことはない」が 24.0%であった。「摂取したことはない」とする割合は、性別では、女性 (16.1%) よりも男性 (30.5%) の方が高く、年代別では、60 代以上 (34.2%) が他の年代と比べて高い。

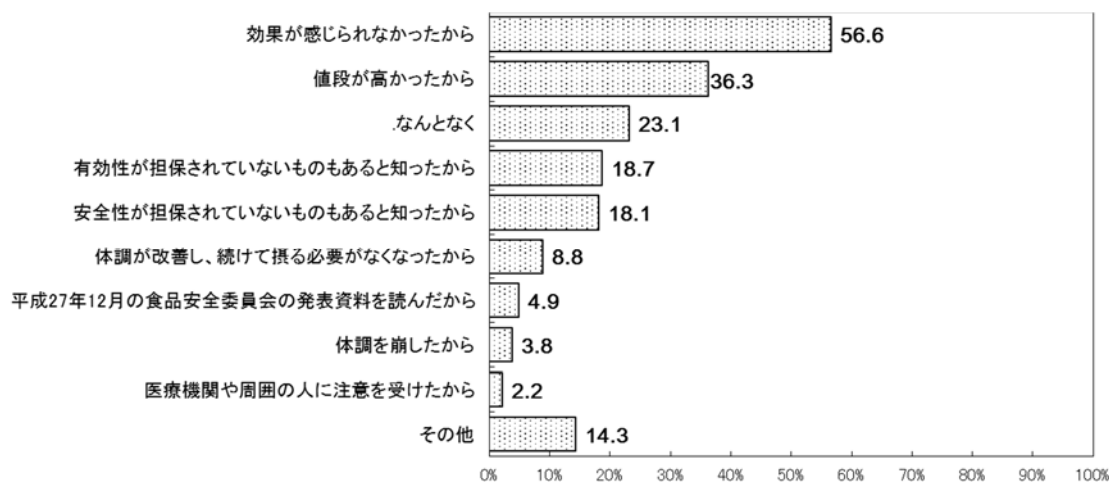
図表 13-1 「健康食品」の摂取の状況 (n=425)



14. 「健康食品」の摂取をやめた理由(問 20)

- 問 19 で「過去に摂取したことがあるが、現在は摂取していない」を選んだ人に、「健康食品」の摂取をやめた理由を尋ねたところ、「効果が感じられなかったから」が 56.6%と最も多く、次いで、「値段が高かったから」が 36.3%、「なんとなく」が 23.1%であった。

図表 14-1 「健康食品」の摂取をやめた理由 (n=182)



15. 「健康食品」を摂取しない理由(問 21)

- 問 19 で「摂取したことはない」を選んだ人に、「健康食品」を摂取しない理由を尋ねたところ、「日頃からバランスのとれた食生活をしており不要だから」が 57.8%と最も多く、次いで「効果を得られるか不明だから」が 53.9%、「安全性が不明だから」が 48.0%であった。

図表 15-1 「健康食品」を摂取しない理由 (n=102)

